MICHELIN COMPANY PROFILE & HISTORY

この冊子の内容を、許可なく転載、複製することを禁じます。 2024 年 1月

MICHELIN

SINCE 1889

Company Profile & History

MICHELIN

SINC E1889

BIRTH OF MIC HELIN.

The brothers, André and Edouard Michelin.

感動から動きはじめた、兄弟の夢。

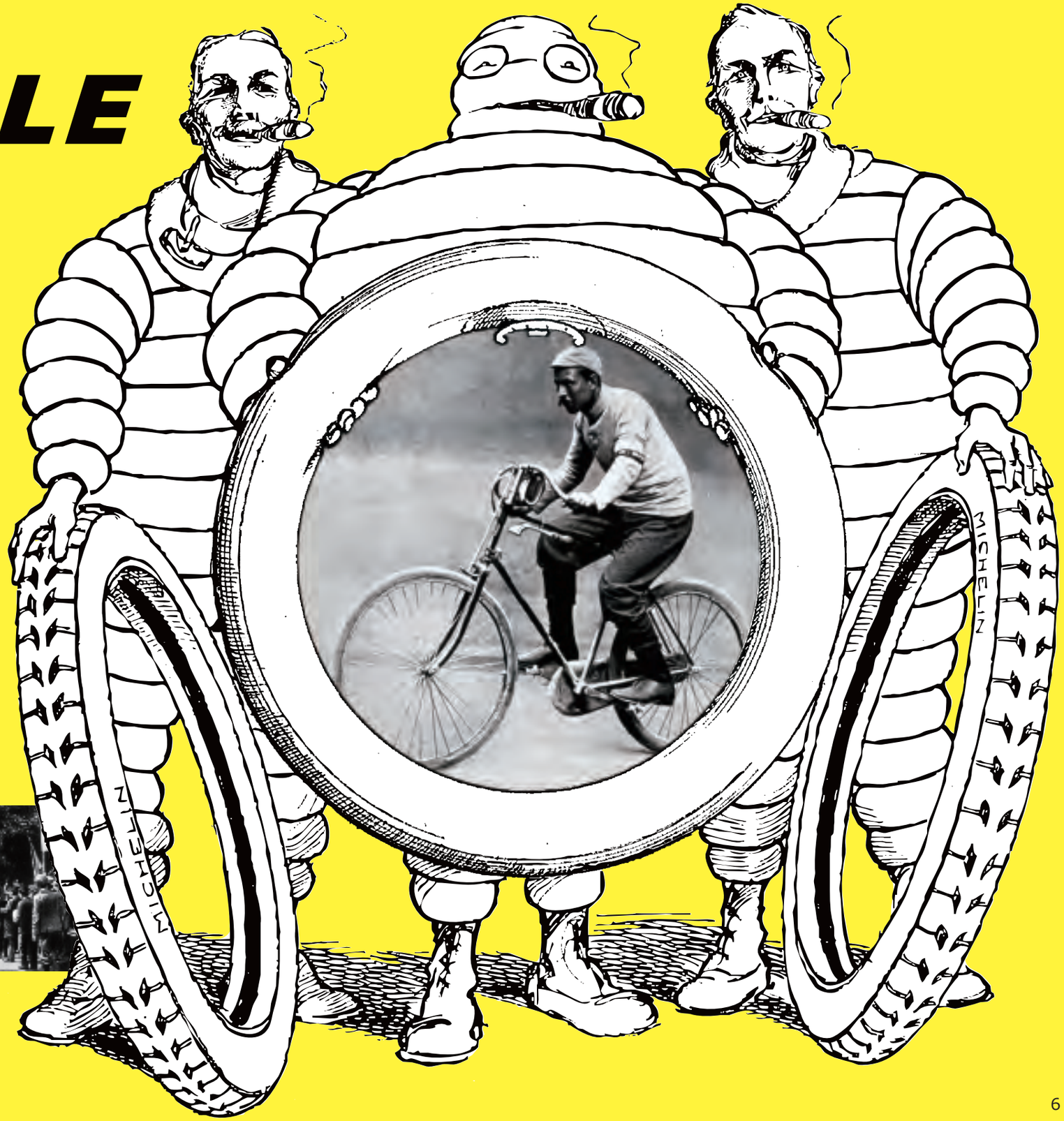
1889年、エンジニアだった兄のアンドレと画家を目指していた弟のエドワールが叔父の経営していた農機具やゴム製品の会社を引き継ぎ、社名をミシュランと改め、ミシュランタイヤの歴史が始まりました。その年、フランスの田舎町クレルモン=フェランで自転車がパンクして困っていたサイクリストを見過ごせず、一晩かけてタイヤを修理。修理し終わった後、当時まだ珍しかったその空気入りタイヤに乗ったエドワールはその乗り心地に感動しました。より多くの人に広めたいという思いで試作に試作を重ね、2年後に、たったの15分で取り付け可能な空気入りタイヤの開発に成功しました。ミシュランは、創設者である兄弟が空気入りタイヤの乗り心地に感動したその時から、全ての人にA BETTER WAY FORWARDを提案するためのイノベーションを続けています。創業者がタイヤに抱いた感動。それがミシュラン社の源。世界中のミシュラン社員の誇りであり原動力です。

DETACHABLE TIRE

THE BICYCLE & ÉCLAIR

世界初、空気入りタイヤでの挑戦。

ミシュラン兄弟は、1891年に開発した着脱可能なタイヤを世に広めるため、初めて自転車の“パリ-ブレスト間往復レース”に参加。見事、2位と8時間もの大差をつけて1着でゴールし、世にミシュランの名を知らしめました。更に重量のある自動車にも空気入りタイヤをつけることができることを証明しようと、1895年には自動車のレース“パリ-ボルドー間往復レース”に参戦。当時まだ空気入りタイヤの装着に抵抗があった車両メーカーからのサポートは得られず、自ら組み立てた“エクレール号”で参戦します。この時、自動車が世界で初めて空気入りタイヤを装着して走ったのです。



MONUMENT DE PARIS

LA TOUR EIFFEL

これまで創刊されたミシュランガイドを積み上げた時の高さは なんとエッフェル塔の100倍

100

ドライブをもっと楽しく。その願いが1冊のガイドに。

そんなミシュラン兄弟はレースの場以外にもタイヤに関する取り組みを考え始めます。車の故障や燃料補給、そしてタイヤのパンクなど、ミシュラン創業当時ドライブにはトラブルがつきものでした。そこで兄弟はより遠くまで快適に楽しくドライブができるように、タイヤの正しい使い方や修理方法、各都市の駐車場やガソリンスタンド、車の整備場、ドライバーが長旅から体を休めるための宿泊施設やレストランなど、ドライブに欠かせないさまざまな情報をまとめた赤い表紙の小さな冊子を作りました。この小さな赤い冊子が今では世界各国のレストランや宿泊施設を紹介する“ミシュランガイド”に進化しました。120年以上も前にタイヤメーカーのミシュランがまだ遠出をするには不安を抱いていたドライバーに配り始めたのがはじまりだったのです。

【ミシュランガイドの星の意味】
❄❄❄:そのために旅行する価値がある卓越した料理
❄❄:遠回りしてでも訪れる価値のある素晴らしい料理
❄:近くに訪れたら行く価値のある優れた料理

THE
“MICHELIN GUIDE”
ミシュランガイド

MICHELIN GUIDE was born to offer driving pleasure.

THE
“GREEN GUIDE”

グリーンガイド

MICHELIN Green Guide is a perfect travel companion.

見知らぬ場所への好奇心をかきたてる、もうひとつのガイドブック。

そして兄弟は、ミシュランガイドよりも訪れる土地をよりよく理解し、
充実した旅を楽しめるような情報を満載した
新しいガイドの作成にも取り組みました。
今では緑色の表紙で旅行者に親しまれる旅行ガイド、
“グリーンガイド”の第1冊目となる
“フランス・ブルターニュ編”は、1926年に発行されます。
今ではミシュラン・グリーンガイド・ジャポンも発行され、
世界中の好奇心に満ちた旅行者に利用されています。

【グリーンガイドの星の意味】
★★★:わざわざ旅行する価値がある　★★:寄り道する価値がある　★:興味深い

Roads without signs.

モビリティの第一歩は、標識をつくることだった。

1908年、“道程作成”部を立ち上げ、旅行の旅程表を無料で作成するサービスを行ったり、1910年には“道路地図”部を設立したりと、ドライバーのためにさまざまなサービスを提供してきました。しかし、当時フランス国内の道路標識は整備されておらず、せっかくのサービスも水の泡。1912年に署名運動により国に働きかけるも実現せず、ついにミシュランは自ら道路標識の整備を始めます。気の遠くなるようなこの活動はなんと1970年代までフランス全土で続けられました。
このミシュラン社が設置した標識は、人々の道しるべとして大変重宝され、今でも古い町で目にすることができます。それは、楽しく安全に、安心できる旅をしてほしいというミシュランの想いがカタチになったものなのです。

ROAD SIGN

°C

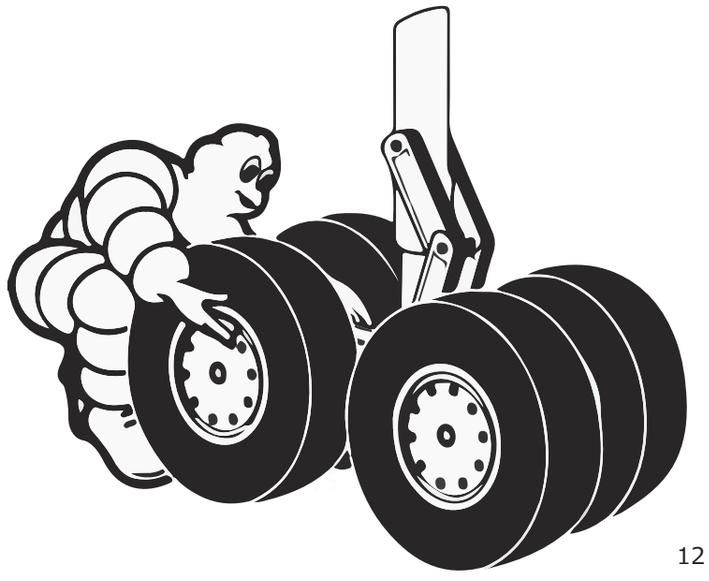
Endurable from -50 up to 250

FROM -5 0 TO 250

Technology supporting air travel.

過酷な条件で安全を担う、空のミシュラン。

航空機用タイヤは、離陸時にはF1車両並みのスピードで走行し、更に離陸時のタイヤ表面温度250℃からフライト時の上空気温-50℃に耐えられる強靭な設計になっています。



To the sky.

働く人や作物が育つ土にまで
やさしいタイヤを。

ミシュランのタイヤ開発の考え方には、現場への理解が大きな要素となっています。農業機械用タイヤは、ミシュランの高い技術を駆使し、低空気圧での走行が可能です。これにより土の踏み固めを抑えることができ、豊かな土地に欠かせないミミズなどの生物が生きやすく、作物の根が張りやすい柔らかい土壌を作り、農作物の収穫量向上に貢献します。更に振動を抑え作業者の体への負担も軽減します。フランスの研究所に農家出身の研究員が従事し、更にスペインのタイヤテストセンターで実際の農家と共同テストなどを行っているミシュランだからこそできる、土、農作物、そして人に優しいソリューションを今後も提案し続けます。

SOIL FRIENDLY

Michelin agricultural tire is friendly to soil, crops and people.

Diameter up to 4m.

最大直径4mにもおよぶ、タフで屈強なタイヤ。

Outer space mobility projects that look to the future.

地球の旅から、宇宙へと夢をのせて。

ミシュランのモビリティへのサポートは地球上にとどまりません。ミシュランはNASAの長年のパートナーとして、スペースシャトル用のタイヤを20年以上にわたり供給し続けました。
2009年には、NASAの次世代月面探査機に専用設計のホイール、“ミシュランルナホイール”を開発。ミシュラン独自技術の空気を必要としないタイヤ、“Tweel（トゥィール）”を基礎に開発した“ミシュラン・ルナホイール”の織布製トレッドは、きわめて低温の環境でも月面探査車のトラクションを維持し、更にタイヤの柔軟性と一定の面圧を維持することができるので、もろい地形やクレーターでの走行も可能にしました。ミシュランは宇宙開発への躍進にも大きく貢献しているのです。

1995.

ミシュランタイヤを装着したスペースシャトルが飛行。

WITH NASA.

宇宙であっても地上であっても同じ。
タイヤは唯一“地”と接する。

この数字が示すものが一体なんだかわかりますか？

100×148

One tire footprint,
each the size of a postcard.

ハガキ1枚との関係。

乗用車とそれが走る地面が唯一コンタクトするのはタイヤ。その“コンタクトパッチ”と呼ばれる接地面は、なんとタイヤ1本あたりたったのハガキ約1枚分。※車の動きを路面に伝えるのはもちろんのこと、雨や雪の路面での排水性を確保するなど、安全性において非常に重要な部分。この唯一接する部分こそが、ドライビングにおいてタイヤが性能を発揮する、まさしく技術の結晶でもある部分なのです。

※タイヤ幅175～225mmの乗用車用タイヤ

技術は極限で磨かれる。

ミシュランは、最新の技術を
レースという高次元での戦いの中で競わせることで、
その結果を市販用タイヤの開発に余すところなくフィードバックし、
より良いタイヤの開発につなげていきます。

着脱可能な空気入りタイヤを世に知らしめるために、1891年に初めてレースに参戦してから、
ミシュランはレースに積極的に参加することで技術を証明してきました。
ミシュランがレースを重要視する姿勢はこれからも変わりません。

MICHELIN tire

TRACK TO STREET

WINNER OF MANY CHAMPIONSHIPS AND COMPETITIONS.

AUTOMOBILE

RACING

日本におけるチャンピオンを獲得した4輪レース

■全日本ツーリングカー選手権（開催期間:1994～1998）
1995：スティーブ・ソバー（BMW・318i /BMWチームシュニッツァー）
1996：服部尚貴（ホンダ・アコード/JACCS MOONCRAFT MOTORSPORTS PROJECT）
1998：関谷正徳（トヨタ・チェイサー/ TOYOTA TEAM TOM'S）

■全日本GT選手権（開催期間:1994～2004）
-GT300クラス
2002：新田守男／高木真一（トヨタ・MR-S／ARTA with A'PEX ※BFグッドリッチブランド）

■SUPER GT（開催期間:2005～）
-GT500 クラス
2011：柳田真孝／ロニー・クインタレッリ（日産・GT-R／MOLA）
2012：柳田真孝／ロニー・クインタレッリ（日産・GT-R／MOLA）
2014：松田次生／ロニー・クインタレッリ（日産・GT-R／NISMO）
2015：松田次生／ロニー・クインタレッリ（日産・GT-R／NISMO）
-GT300 クラス
2005：山野哲也／佐々木孝太（トヨタ・MR-S／TEAM RECKLESS）
2007：大嶋和也／石浦宏明（トヨタ・MR-S／apr）
2008：星野一樹／安田裕信（日産・Z／MOLA）

■スーパー耐久開催期間（開催期間:1998～）
-ST1クラス
2006：田中哲也／新田守男／高木真一（ポルシェ・911 GT3／ARTA TEAM DENAG）

MOTORCYCLE RACING

日本におけるチャンピオンを獲得した2輪レース

■全日本ロードレース選手権

-GP500（開催期間:1981～1993）

1992：ダリル･ビーティー（ホンダ･NSR500）

-TT-F1クラス（開催期間:1984～1993）

1986：辻本聡（ヨシムラ･スズキGSX-R750）

1987：大島行弥（ヨシムラ･スズキGSX-R750）

1989：ダグ･ポーレン（ヨシムラ･スズキGSX-R750）

-SUPER BIKE クラス（開催期間:1994～2002）

1995：青木拓磨（ホンダ･RVF/RC45）

1996：青木拓磨（ホンダ･RVF/RC45）

1998：伊藤真一（ホンダ･RVF/RC45）

-JSB1000（開催期間:2002年～）

2004：井筒仁康（ホンダ･CBR1000RRW）

-TT-F3 クラス（開催期間:1984～1991）

1989：ダグ･ポーレン（ヨシムラ･スズキGSX-R400）

■鈴鹿8時間耐久ロードレース（開催期間:1978～）

1983：エルブ･モアノー／リカルド･ユービン（スズキ･GS1000R）

1986：ワイン･ガードナー／ドミニク･サロン（ホンダ･RVF750）

1987：マーチン･ウィマー／ケビン･マギー（ヤマハ･YZF750）

1989：ドミニク･サロン／アレックス･ビエラ（ホンダ･RVF750）

1990：平忠彦／エディ･ローソン（ヤマハ･YZF750）

1991：ワイン･ガードナー／マイケル･ドゥーハン（ホンダ･RVF750）

1992：ワイン･ガードナー／ダリル･ビーティー（ホンダ･RVF750）

1995：アーロン･スライト／岡田忠之（ホンダ･RVF/RC45）

1996：コーリン･エドワーズ／芳賀紀行（ヤマハ･YZF750）

1997：伊藤真一／宇川徹（ホンダ･RVF/RC45）

1998：伊藤真一／宇川徹（ホンダ･RVF/RC45）

1999：岡田忠之／アレックス･バロス（ホンダ･RVF/RC45）

2001：バレンティーノ･ロッシ／コーリン･エドワーズ（ホンダ･VTR1000SPW）

2002：加藤大治郎／コーリン･エドワーズ（ホンダ･VTR1000SPW）

2004：宇川徹／井筒仁康（ホンダ･CBR1000RRW）

2005：清成龍一／宇川徹（ホンダ･CBR1000RRW）

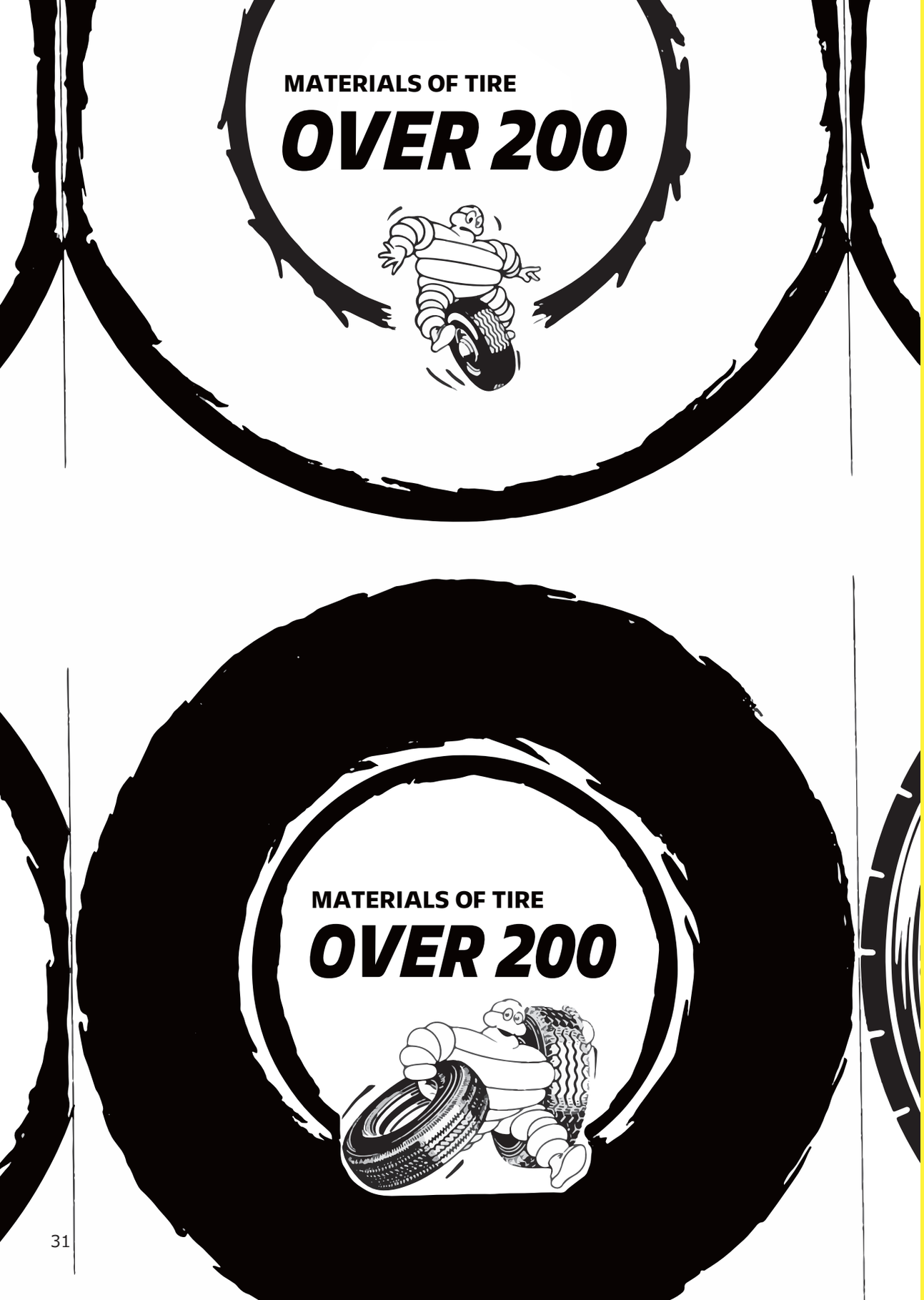
MICHELIN
Total Performance

すべての性能を、妥協しない。

車と路面の唯一の接点であるタイヤには、たくさんの役割が求められます。安全なドライビングや安心感を持って走るための制動力とグリップ。運転することを楽しめ、疲れを感じさせない快適さや静粛性。そして、性能を持続させるための耐久性。さらに、環境性能。
ある一つの性能に秀でたものを作るのではなく、ドライビングに必要な全ての性能を高い次元で実現する。どの性能も水準以上のパフォーマンスを備え、かつ、それぞれが調和していること。ミシュランはこれからもお客様が本当に必要とする、トータル・パフォーマンスに優れたタイヤを追求していきます。

PERFORMANCE MADE TO LAST

「最後まで続く性能」を目指して。



Materials of tire

200以上もの素材を駆使して生み出される高性能。

OVER 200

タイヤは、天然ゴム、合成ゴム、カーボンブラック、シリカ、テキスタイルや補強剤、バイオマス（動植物から生まれた再利用可能な有機性の資源）などの200以上もの素材で形成された複雑な製品です。

1992年にミシュランは新たなコンパウンド、シリカ（二酸化珪素）を配合することで、ウェット路面でのグリップ力や摩耗性能を犠牲にすることなく、転がり抵抗を大幅に低減することに成功しました。今ではあたりまえになった低燃費タイヤはこの時生まれたのです。

ミシュランは持続可能なモビリティを目標にバイオバタフライ・プロジェクトを開始しました。現在は石油から製造されている合成ゴムの化合物であるブタジエンを、バイオマス由来のエタノールから生成することを目指しています。2050年までに、ミシュランタイヤの製造は、80%持続可能な原材料に切り替わります。バイオブタジエンはこの目標の約20%を占めると予想しています。

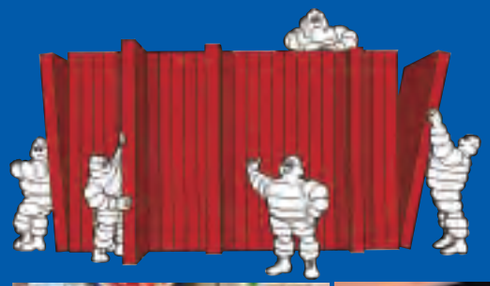
PROFESSIONAL

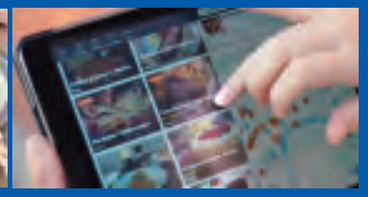
より良い製品とサービスへの追求を妥協しない、
世界中で活躍するミシュランのプロフェッショナル。

Employee : 127,000 People

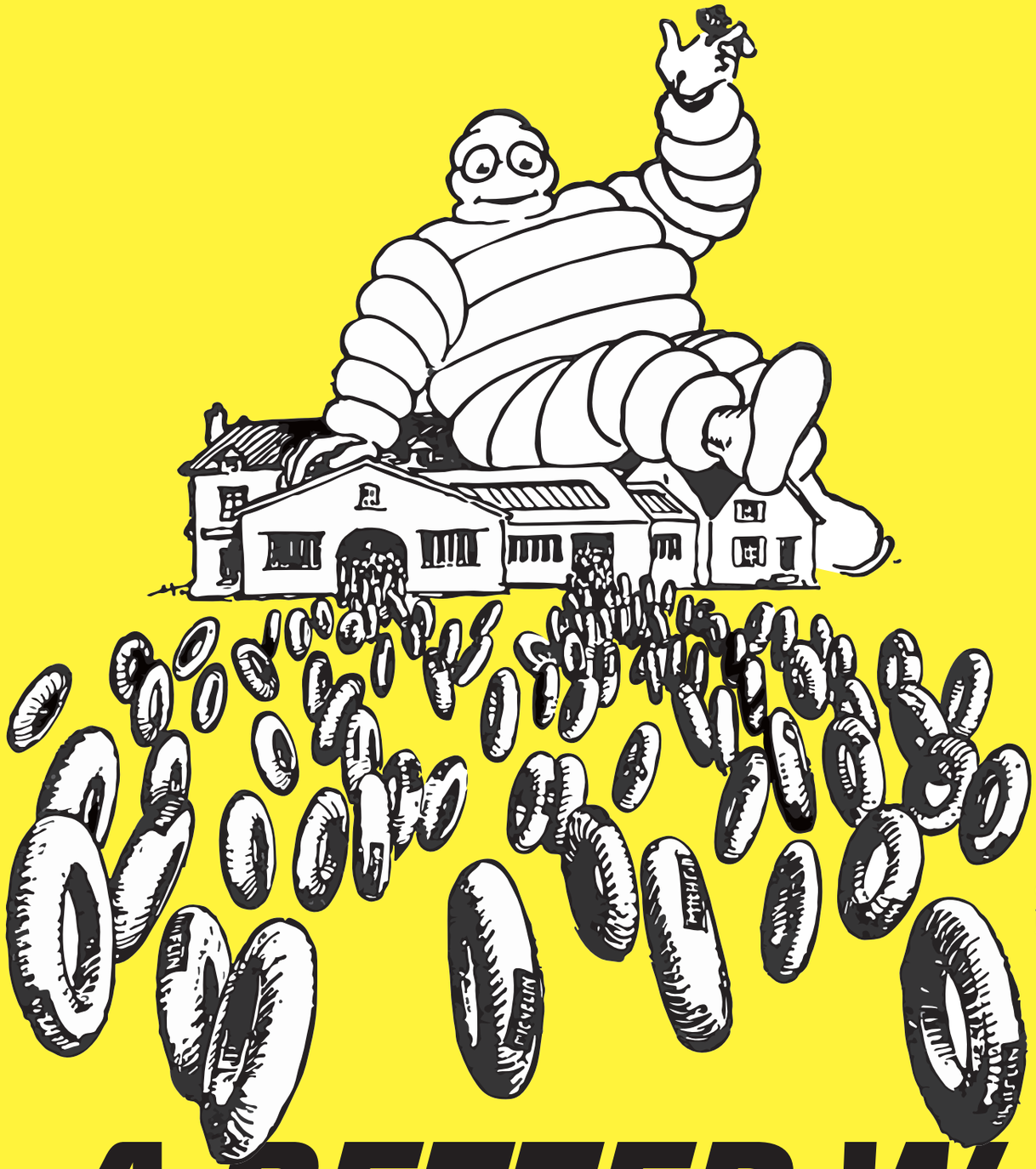
グループ従業員、127,000人。

ミシュランは、フランス クレルモン=フェランに本社を置き、1世紀以上にわたり、
イノベーションを推進しモビリティの未来を創造してきました。





ミシュランは、お客様にとって最適なタイヤ、サービス、ソリューションを170カ国で提供しています。69製造拠点で、約2億本のタイヤを製造（2019年実績）するとともに、旅行ガイド、ホテル・レストランガイド、地図、デジタルサービスなど、皆様のモビリティをユニークで充実した体験にするお手伝いや、多様な産業に提供するハイテク素材を開発しています。



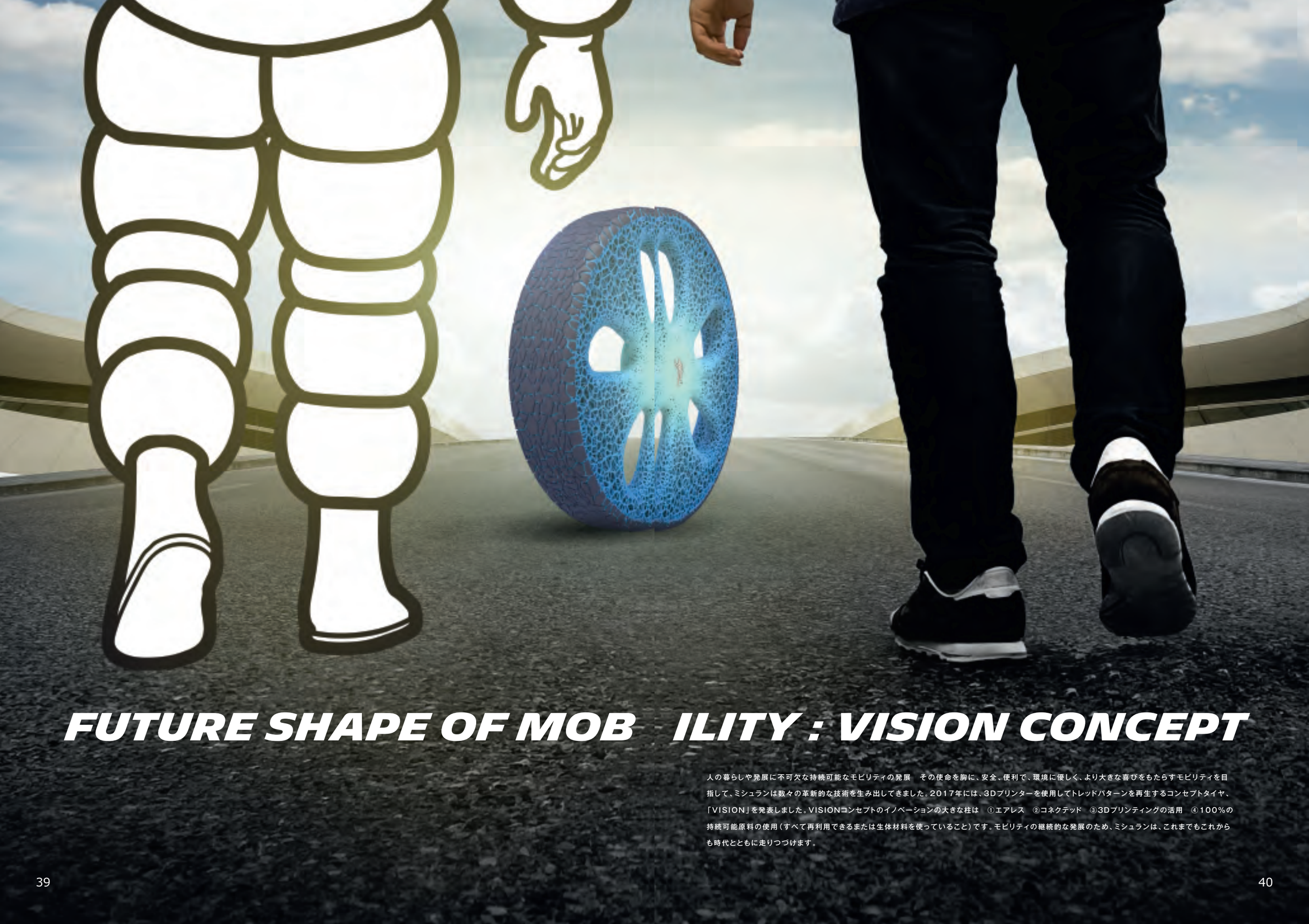
A BETTER WAY FORWARD

モビリティは、人と経済が発展していくために欠かすことのできない大切な要素です。ミシュラン兄弟が初めて空気入りタイヤに乗った時に感じたあの感動。それがミシュランの基礎である“A BETTER WAY FORWARD”です。より遠くに、より安全に快適にそして最適なコストで人や物を運ぶ、そのよ うにモビリティに貢献することが、私たちの責任であると同時に、誇りであり、希望であり、よろこびであり、ミシュランの未来なのです。

IN THE MICHELIN OF TOMORROW, EVERYTHING WILL BE SUSTAINABLE

ミシュランは気候変動と環境保護のため緊急に行動を起こさなければならないと認識しています。ミシュランは2050年までにミシュランが製造するすべてのタイヤを100%リサイクルし、タイヤ原材料の80%を持続可能な材料に置き換える目標を掲げています。持続可能なゴムの木の栽培、生物由来の素材の開発と使用、原材料とエネルギー消費を抑え軽量で初期性能が長く続くタイヤの開発と生産、熱分解テクノロジーで使用済みタイヤを良質な原材料にリサイクル、など循環経済4Rに取り組みます。

ミシュランは4Rを推進し、タイヤのライフサイクル全体を通じて、循環型経済に積極的に関与しています。原材料調達、設計から寿命まで、ミシュランの製品とサービスはより少ないリソースを使用し、環境と社会への負荷を最小限に抑えます。



FUTURE SHAPE OF MOB ILITY : VISION CONCEPT

人の暮らしや発展に不可欠な持続可能なモビリティの発展　その使命を胸に、安全、便利で、環境に優しく、より大きな喜びをもたらすモビリティを目指して、ミシュランは数々の革新的な技術を生み出してきました。2017年には、3Dプリンターを使用してトレッドパターンを再生するコンセプトタイヤ、「VISION」を発表しました。VISIONコンセプトのイノベーションの大きな柱は　①エアレス　②コネクテッド　③3Dプリンティングの活用　④100%の持続可能原料の使用（すべて再利用できるまたは生体材料を使っていること）です。モビリティの継続的な発展のため、ミシュランは、これまでもこれからも時代とともに走りつづけます。

ABOUT NIHON MICHELIN TIRE

会社紹介

日本でのタイヤ販売事業は1964年にはじまりました。東京オリンピック開幕に合わせて、浜松町・羽田空港間に新設されたモノレールに、ミシュランスチールラジアル“X”タイヤが採用されたのが日本におけるミシュランの第一歩です。1975年に日本ミシュランタイヤ株式会社を設立し、日本市場におけるプレゼンスを着実に高めてきました。今ではすっかり浸透したスタッドレスタイヤやエコタイヤなども、ミシュランは時代に先駆けて日本市場に導入してきました。

ミシュランはタイヤ事業を核としながら、モビリティ関連サービス&ソリューション、モビリティを充実した体験にするお手伝い（ホテル・レストラン・旅行ガイドやデジタルソリューション）、ハイテク素材分野での持続可能な成長を目指し、日本および急速に発展し続けるアジア市場のニーズに的確かつ迅速に対応していきます。

会社名	日本ミシュランタイヤ株式会社
代表取締役社長	須藤 元
資本金	1億円
従業員数	約500名
設立	1975年6月
所在地	〒373-8668 群馬県太田市植木野町880 （2023年8月 本社移転）

事業内容

タイヤ

市販ならびに直需市場向け、乗用車・商用車用、トラック・バス用、モノレール用、建設・鉱山車両用、産業車両用、農業機械用、航空機用、二輪自動車用タイヤ・チューブ・タイヤ関連用品の輸入、販売、マーケティング、サービス、研究・開発

ミシュランブランドに加え、下記ブランドのご提案もあります

乗用車・商用車用 トラック・バス用: BFグッドリッチ

建設・産業車両用: カムソ

ミシュランガイド

2007年、アジア初のミシュランガイド「ミシュランガイド東京2008」を発行しました。日本語版の初版は発売後4日間でほぼ完売し追加で印刷するなど大きな反響をよびました。

2020年からは、持続可能なガストロノミー（美食）を実践するレストランの取り組みに光を当てています。レストランのエコシステム全体を評価し、食材の生産や管理、作業の仕方やメニューなど、持続可能なガストロノミーに真摯な取組みを行う施設をグリーンスターとして紹介しています。

初版以来、ミシュランガイドの使命は変わりません。常に読者の旅の友となることです。伝統的な旅館から最先端のホテル、フランス料理から居酒屋まで、最良の宿泊施設及び飲食店をご提案しています。

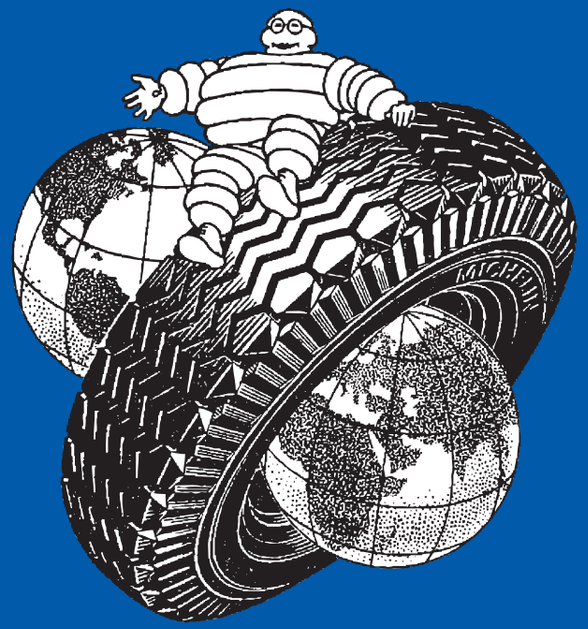
ミシュラン・ライフスタイル・リミテッド

ミシュラン・ライフスタイル・リミテッドは、ミシュランブランドが消費者に身近な存在となるように、そしてより広い分野で展開することでさらに認知度を高めるために、2000年に設立されました。日本では、ミシュランを体現するキャラクターであるミシュランマンからインスピレーションを得た雑貨・コレクショングッズのカテゴリーをはじめ、自動車用品やフットウェアなど、身近でミシュランブランドを体感してもらえるような製品を今後も皆さまにお届けします。

HISTORY OF

MICHELIN GROUP

沿革:ミシュラングループ



1832	ミシュランの前身となる農業機械とゴム製品を製造する会社設立
1889	ミシュラン兄弟が経営に加わり、社名をミシュランに改める
1891	自転車用の着脱可能なタイヤを開発、“パリ・ブレスト間往復レース”で実証
1895	初の空気入りタイヤ装着自動車“Éclair(エクレール)”号で“パリ・ボルドー間往復レース”完走
1898	ミシュランのコーポレートキャラクター“ミシュランマン”誕生
1899	ミシュランタイヤを装着した電気自動車“Jamais Content”号が世界初時速100kmの壁を突破
1900	最初のミシュランガイド刊行
1908	道程作成部を開設し、無料の旅行道路行程作成サービスを開始
1908	トラックやバスの普及のきっかけともなる複輪タイヤの考案
1929	鉄道用空気入りタイヤ“Micheline(ミシュリーヌ)”発表
1931	道路標識を製造開始しのちにフランスで設置
1946	ラジアルタイヤに関する特許を取得
1951	パリの1番地下鉄に初めて空気入りタイヤを装着
1952	初のトラック用ラジアルタイヤを発売
1959	初の建設機械用ラジアルタイヤを発表
1965	クレルモンフェラン北部にラドゥー研究開発テストセンターを開設
1979	F1世界選手権でミシュランタイヤを装着したフェラーリがタイトルを獲得
1981	初の航空機用ラジアルタイヤ「MICHELIN AIR X」を発表
1984	初の二輪用ラジアルタイヤを開発(発売開始は1987年)
1994	省燃費を実現するタイヤ「MICHELIN ENERGY」シリーズ発表
1995	ミシュランタイヤを装着したスペースシャトルが飛行
2003	一定の低空気圧で走行可能な新設計農業機械用タイヤ「MICHELIN XEOBIB」を開発
2005	パンクしない空気のいらないタイヤ「MICHELIN X Tweel」をコンセプトタイヤとして発表
2009	NASAの次世代月面探査車に「Michelin Lunar Wheel(ミシュラン・ルナホイール)」採用
2013	ブラジル・中国・インドで新工場を稼働
2014	冬用タイヤとしても認証された初の夏用タイヤ、「MICHELIN CrossClimate」を欧州市場に導入
2015	運送事業者向けのデジタルソリューションサービス「MICHELIN TIRE CARE」を展開
2017	持続可能なモビリティを具現化する未来のタイヤ「MICHELIN Vision concept」を発表
2019	乗用車用エアレスタイヤ「MICHELIN Uptis prototype(アプティス プロトタイプ)」を発表

HISTORY OF

NIHON MICHELIN TIRE

沿革:日本ミシュランタイヤ

1964	ミシュランのスチールラジアル“X”を装着したモノレールが浜松町-羽田空港間で開通
1975	日本エックスタイヤ販売株式会社(日本ミシュランタイヤ前身)設立
1978	日本初の新車装着タイヤデビュー 三菱ミラージュに「MICHELIN XZX」が採用。同じ時期に日産スカイライン、フェアレディZなどからも指名を受ける。
1980	建設機械用タイヤ日本デビュー 高知県・稲村ダムの建設工事で、ミシュランの建設機械用タイヤ「MICHELIN XRB」が活躍。
1982	スタッドレスタイヤを日本で初めて販売 まだスパイクタイヤ全盛だった時代に、ミシュランはスタッドレスタイヤ「MICHELIN XM+S 100」を発売。 “スパイクタイヤ粉じんの発生の防止に関する法律”が施行される10年前からスタッドレスタイヤを推進してきた。
1982	大阪新交通にミシュランタイヤ装着 大阪南港の新交通“ニュートラム”に、補助輪(中子)を内蔵したタイヤ「MICHELIN XZE TL」が採用され、 1981年の開通時より課題となっていた騒音や乗り心地の改善に貢献。
1989	ミシュランオカモトタイヤ設立
1990	日本向けにゼロから開発された初のタイヤ「MICHELIN FIZZAROW」が登場
1991	ミシュランタイヤをANAが採用 日本で初めてミシュランのラジアルタイヤ「MICHELIN AIR X」を装着した航空機(エアバスA320)が初フライト。
1991	日本にアジア市場向け研究開発センター誕生。ミシュランリサーチアジアを設立
1993	転がり抵抗を低減し省燃費を実現した初のグリーンタイヤ「MICHELIN MXGS」を発売
1994	JTCCで日本の4輪レースにデビュー
1997	鈴鹿8耐で6位まで独占
1998	日本初のトラック・バス用低燃費オールシーズンタイヤ「MICHELIN XJD4 GREEN」発売
2006	トラック・バス用オールシーズンタイヤ「MICHELIN XJE4 MIX ENERGY」が“グッドデザイン賞”受賞
2007	「ミシュランガイド東京2008」発行
2008	トラック・バス用シングルタイヤ「MICHELIN X ONE」が“グッドデザイン賞”受賞
2009	外国企業として初の“エコファースト企業”認証
2010	“リグループ”がリトレッドと同様にグリーン購入法の“特定調達品目”に指定
2011	ミシュランリサーチアジア株式会社を合併、日本ミシュランタイヤ株式会社1社体制とする
2012	ミシュランライフスタイルから「Velo MICHELIN」シリーズ登場
2014	日本ミシュランタイヤ創設50周年

ミシュランのスポークスマン

ビバンダム

日本ではミシュランマンでおなじみのミシュランのコーポレートキャラクターは、1898年、創業者のミシュラン兄弟が積み上げられたタイヤの山からインスピレーションを得て誕生しました。

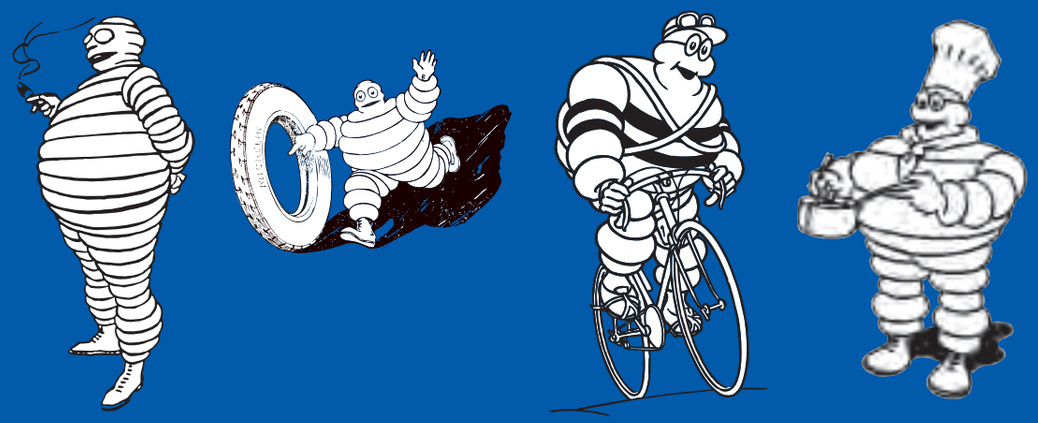
ヌンク・エスト・ビバンダム

「NUNC EST BIBENDUM」

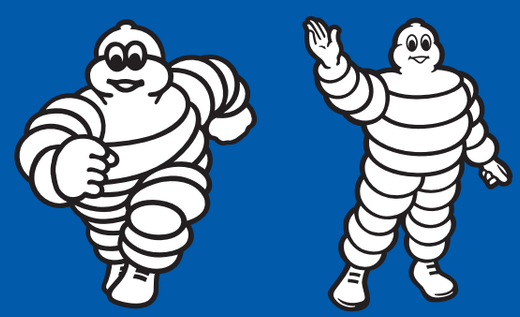
ミシュランマンが誕生した最初のポスターのキャッチコピーで、“今こそ飲み干すとき”という意味のラテン語です。“ミシュランの空気入りタイヤは釘やガラス破片などの障害物を飲み込む”、つまり耐久性があり、パンクにも強い印象を感じさせるこの言葉が、ビバンダムの名前の由来です。

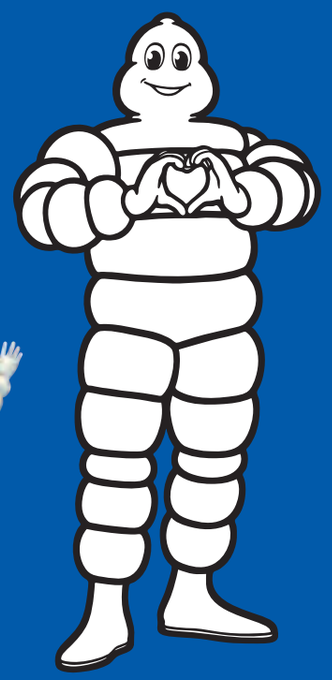
BIBEN DUM

（ミシュランマン）



1910　1925　1954　1960





1984　1998　2001　2017~

ミシュランマンの誕生当時、自動車は富裕層だけの持ち物でした。そんな上流階級の人たちは、丸メガネを掛け、葉巻を吸い、ワインを飲んでいたので、その姿を当時のミシュランマンに反映させていました。ミシュランマンの体が白いのは、当時まだ高級品だったタイヤは一つ一つ白いクレープ紙で包まれていたからだとも、原材料にカーボンブラックが使われていずタイヤは淡い色をしていたからだ、とも言われています。

その後ミシュランマンの表情は、ドライバーに安心感を感じてもらうため柔らかく笑顔になっていきます。時代と共にミシュランマンも進化しています。これからもミシュランのメッセンジャーとして各国を飛び回ります。